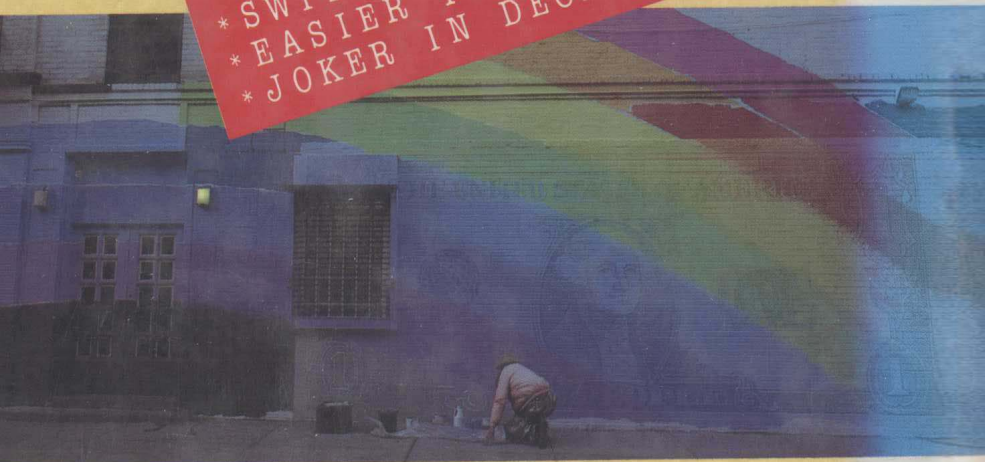


# 死ぬより簡単

大沢在昌

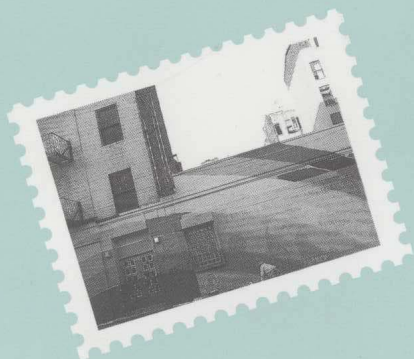
\* VIDEO, SLEEP  
\* SWITCHBLADE  
\* EASIER THAN DEATH  
\* JOKER IN DECEMBER



講談社

# 死ぬより簡単

大沢在昌



講談社

# 死ぬより簡単

一九九〇年七月二〇日 第一刷発行

著者 大沢在昌

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二／郵便番号一―二二  
電話 東京〇三三九四五一―二二一(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 一四五〇円(本体一四〇八円)

乱丁本・落丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。  
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本に  
ついてのお問い合わせは文芸芸文芸図書第二出版部宛  
にお願いいたします。

© Ammas Ohawa 1990 Printed in Japan

死ぬより簡単

写真  
菅原光博

装幀  
安彦勝博

## 目次

ビデオよ、眠れ	7
スイッチ・ブレード	107
死ぬより簡単	171
12月のジョーカー	235



ビデオよ、眠れ





ふたつの部屋が、ガラス窓と厚い二重の防音扉でへだてられている。片方は六畳の広さで、ピアノとテーブル、三本のマイクスタンドとひとりの人間がいるきりだ。もうひとつの八畳ほどの部屋には、四台のオーブンリールテープデッキ、二台のレコードプレーヤー、二台のカセットデッキ、部屋の四分の一を占めるミキシングユニット、椅子、テーブル、五人の人間、煙草の煙、が充満している。

五人のうちのひとり、ディレクターの井川が、ボタンやレバーの並んだユニットの左端にあるトークバックボタンに触れた。

「すいません。最後の『夜が明ける前に』の『け』の部分、ちょっとブレースが入ったみたいです。もう一度下さい」

「はい」

明瞭な返事と息づかいが返ってきた。トークバックボタンを押さぬ限り、録音室の会話がスタジオに聞こえることはない。

井川が一度外した指をボタンにかけ、低い事務的な口調でいった。

「中CM六十秒、テイクスリー」

アシスタントの管が、左手を広げキューを出す。ガラスごしにそれを見ていた華井みゆきが

視線を手元に落とした。

「夢から醒めた街が、長い長い溜息をつく。

笑い。ざわめき。叫び。

今はどこにもないふたりの足跡。別れは、ほんのさっきだというのに。

東と西に分かれる道を、影だけがのびていく。

とき。止められますか？

今日がきのうに。暖かな部屋が冷えていく。

とき。止められますか？

夜が明ける前に。帰りつきたい日々。

刻みゆく夢。プリオール・ウォッチ

井川が原稿から目を上げ、私を見た。それが癖の、ジッポの蓋を鳴らしている。

「いいのではないでしょうか」

私がいようと、ゆっくり頷いた。トークバックボタンに触れる。

「プレイバックします」

ミキシングエンジンニアの加藤が素早く指を走らせた。リモートコントロールで、部屋の隅にある三番デッキが回る。高速回転のキュルキュル、という音が止むと、たった今録音したナレーションがプレイバックした。スタジオにも流れる。

流れ出すナレーションに全員が耳を傾けた。SE（効果）の野崎老が顔をほころばず。

「今日のみゆきさん、声が艶っぽいね。いいことあったのかな」

「野崎さん、本人に訊いてみたらどうです？」

管が返した。

「野崎さんなら話してくれるかもしれない」

「年寄りだと思って馬鹿にしてるな」

井川が煙草をくわえ、ジッポを鳴らした。

プレイバックされたテープは、肉声よりも、タレントのその日の体調、気分を明確に記録している。欠点も長所もクリアに拡大するのだ。

「ちょっと寝不足気味なのじゃないかな」

井川がウエスタンプブーツにかかったジーンズの裾をまくりながら呟いた。

「売れてきたもんね、彼女」

私が合わせた。

「食品が一本、車が一本、あと灯油だけな。このブリオール・ウォッチと合わせて四本でしよ」

管が指を折る。

「ほら、オッケイ出してあげなけりゃ」

野崎が管をせきたてた。管が右端の方のトークバックボタンを押した。井川は触れ、管は押す。三十四と二十五のキャリアのちがいかもしれない。

「はい、オッケイです。ありがとうございます」

華井みゆきが原稿をたたみ、立ち上がった。重そうに二重扉をひいて出てくる。新劇の女優だということだが、舞台を見たことはない。声は、確かに私が書いているコマールシャルではなく、しばしば聞くようになった。

「お疲れ様です」

「お疲れ様でした」

答えて、録音室の隅のソファに腰かけた。

「音楽、どうします？」

井川が私に向き直った。スポーツマンタイプの体型をしていて、年の割りには髪が薄い。オーディオと車に凝っているが、彼だけではなく、広告代理店「電広」の若手制作スタッフは車にうるさい。

「今回は井川さんの好みというわけにはいかないな」

私はいった。井川は六〇年代のポップスが好きで、夏の商品には必ずロックンロールを使いたがる。一度、彼と共に作ったFM用のひと夏のコマージュ八本にすべてビーチボーイズを使ったことがあった。

「佐伯さんの好みだと渋めのジャズですか」

管がいう。

「ジャズ？」

私の目を見た井川に、首を振った。

「これにジャズじゃあまりにCMだ、よそう」

井川は安心したように頷いた。ラジオ用のコマージュは、聞き心地がよすぎるのも問題なのだ。聴取者の耳の左から右に流れ、残るものがない。

「何かフュージョン系で、あんまりメロウっぽくない奴、ないかな」

「フィル・コリンズは？」

管がいった。

「お前ねえ……」

井川と加藤が笑い出す。ふたりは年が一緒に、始終、車とオーディオの話に花を咲かせている。

「自分が女の子口説くときのテープ使えばいいってもんじゃないよ」

「そんなことないですよ」

管は慌てた。いつも最新の恰好をしていて、十代のタレントには結構、人気があるらしい。腰が軽く、現場では重宝している。

「モリス・ホワイトは？ 女口説きには使っていないけど」

「アース・ウインド・エンド・ファイアの？」

「ソロ・アルバム。決め、あるよ」

私がいとうと、井川が管に目配せした。

「じゃあ、買って来ます」

足早に録音室を出ていく。「電広」の制作ビルは、神田の神保町近くにある。学生街に行けば、大きなレコード屋は何軒も並んでいる。たいてい、「プリオール・ウオッチ」の月変わりコマージュは、ナレーション録りのその日のうちに完パケに仕上げてしまう。

F Mの一時間番組の中で使われる作品だ。月に四回、年に十二本。月が変われば、新しいものが流れる。ナレーターは、番組と同じ華井みゆき。「プリオール・ミュージック・アワー」の前CMと後CMは「電広」のスタッフが書き、中CMだけを外注の私が書く。この状態が七年つづき、制作ベースも安定している。

こういったCMライターの仕事を私は、月に平均六本ほどこなしている。それだけで食べられぬこともないが、さほど時間のかかる作業ではないので、他の仕事もしている。

そちらの打ち合わせが迫っていた。

「SEの方は？」

私は腕時計をのぞき、訊ねた。

「ざわめきが少しと、パーティション、それにサイレンがかぶった夜の街」

野崎老がいった。野崎老は、今年六十五を越えるベテランで、草創期のテレビの外国ドラマの効果をもとど手がけている。いつも飄々としていて、白い頬髯をのばし、トレッドマークの、小さな毛糸の帽子をぬいだことがない。私と同じ、外注のフリーランサーだが、毎回必ず原稿を読んだ上で、新たな「音」を作ってくる。自分で必要と感じれば、自腹を切つても、外国や地方に飛んで、「音」を拾ってくる硬骨漢でもある。

だから「外国に行つても何かを見た、という印象はほとんどないね」と笑う。ただし、音さえ聞けば「あ、これはニューヨークだ」とか「オーストラリア、グレートバリアリーフだ」とわかるという。音の職人なのだ。

「全部行く？」

井川の問いに首を振った。

「アタマでざわめき、ケツでサイレン。音楽はざわめきから起こして、サイレンの少し前で絞ろう」

「じゃあ『長い長い』のあたりで音楽、起こそう」

加藤がサインペンで原稿に印しをつけた。

「絞るのは？」

「二番目の『とき、止められますか』くらいかな」

「とりあえず、それでテストをしてみても、よければ録っちゃおう」

管がレコードを抱えて戻ってきた。入れちがいに華井みゆきが「お疲れ様」を告げて出て行く。ナレーション録りが終われば、タレントのいる場所はなくなる。最後まで完パケ造りを見届けて帰るタレントは、まずいない。

プレーヤーに載せたレコードを頭出しして、曲選びにかかった。これという曲が見つかる。と、六十秒以上の曲の流れをテープに納める。ナレーションのみのテープとあわせて、四台のデッキのうちの二台がそれで塞がる。

残りの二台のうちの一台に野崎老がこしらえてきた効果音のテープがはめこまれ、最後の一台が、放送局に渡すためのマザーテープの録音に使われる仕組だ。

「じゃリハーサル、行こう」

それぞれの再生用テープはすぐに頭が出るよう、掌でリールを微妙に調整する。たとえカセットテープの音質が現在以上に向上したとしても、コンマ何秒の音出しをテープデッキの再生ヘッドにびたりと合わせていくこの作業で、オープンリールに譲らざるを得ないだろう。

それぞれのデッキに人が付く。リモートコントロールが可能でも、やはりタイミングを取るには、ひとりひとり専念した方がまちがいがいない。

「じゃあ行きます」

管がナレーションテープの入ったデッキのスイッチを押した。井川がユニットのストップウオッチボタンに触れる。同時に野崎老が効果音のテープデッキを回す。



ざわめきのSEを加藤が「立て」た。少し遅れて華井みゆきのナレーションが流れ出す。  
「はい、入ります」

井川がミュージックテープのデッキを回した。加藤が音量をゆっくり上げ、さしかえにSEの音量を絞る。

私は目を閉じて耳をすませた。音楽にのせればたいいのナレーションが心地よく「様」になる。高感度マイクがどうしても拾うわずかな呼吸音は、音楽の向こうに消えてしまう。

「はい」

ナレーションと音楽が半ば過ぎた時点で井川が声をかけ、加藤の指が音楽の音量を絞っているのを感じた。

「はい、行きます」

野崎老が、その間に早送りし、頭出しをしておいた二番目のSEを再生する。

夜の街、遠ざかるサイレン、かすかなクラクションの響きにかぶって、

「刻みゆく夢。プリアール・ウォッチ」

の部分が流れた。

私は目を開いた。ユニットの高くなった部分にデジタルウォッチが入っている。表示板は「五十九・六」を示していた。

「時間は？」

野崎老が訊ねた。

「五十九・六。びったり大丈夫」

あたり前のことだが、放送のプログラムは秒単位で埋まっている。六十秒のCMが六十・五